

はこだての未来・教育フォーラムの開催報告について

パネル・ディスカッション「はこだてを好きになる教育」 パネリスト発言要旨

(1) パネリスト 函館大学教授 藤川 隆 氏

- 商学部という視点で見ると函館は産業の宝庫であり、産業循環をリアルに学ぶことができるフィールドだが、地元就職する学生の割合は38.1%であり、学生から「函館に残りたいが希望する職種がない」という相談を受けることもある。函館では、人口減少が問題になっている。学生をどんどん学校から出して、地域の方と一緒に学びを共有していきながら、大学も地域も元気になるようなサイクルを作っていくことが大切である。そのことは、若い人が函館で働いて、自分の力を発揮できるような環境を作ることにもつながると思う。
- 子どもが函館の良さを感じる学びを展開するフィールドも、身近にたくさんあると思う。それを体験ということだけでいくと、幼稚園、もっと小さいときかもしれないが、小学校・中学校・高校、もしかすると大学も含めて、地域とどう関わっていくかなど、ふるさとキャリア教育のステップをずっと函館で刻んでいくことができる。そのプログラムを開発することが、まずやれると思う。

(2) パネリスト 一般社団法人はこだて地方創生研究会副代表 藤澤 義博 氏

- 函館の子どもたちに地域を知ってもらうきっかけを作るため「はこだて学生政策アイデアコンテスト」を開催したが、地域経済は学生たちがどのような研究を行っているか知る機会が少なく、人材の確保に苦労しているので、子どもたちが企業のことを知り、企業が学生のニーズを知るきっかけとなった。学校・地域・子どもたちがお互いに理解し合わないまぢづくりはできない。
- 函館を好きになるイコール函館に住み続けなければならないと子どもたちに教えるのではなくて、函館を好きになって、活躍できる人は世界で活躍してくださいと子どもたちに育てて欲しい。世界で活躍できる子どもたちはどんどん世界に出たほうがいい。可能性を引き出してあげることが我々大人の課題だと思うので、子どもたちを閉じ込めることが、どんなに悲しいことかと思う。どうしても世界で活躍できない人がここにいるのであれば、それと同じだけ地元で伸ばしてあげればいい。
- 人のご縁とか、ネットワークをつなぐこと、自分ひとりの時間は365日24時間と限られているが、ひとりでは力が出せない子どもでも、みんなのネットワークと、みんなの力を合わせたら、できることはたくさんある。僕はそういうことをや

ってきたもので、そういう積み重ねが、子どもの可能性を引き出してあげることになり、函館の教育が、函館を好きになる人を増やすことになると思う。

- ボランティアを子どもたちにやらせる時に、一番大事なのは、ただ単にボランティアに参加することが美しいことではなくて、そのボランティアの意味を教えてあげなければならない。何故このボランティアをやらなきゃならないのか、このボランティアをやったときに何が必要なのか、このボランティア活動というのが何故必要なのか、という疑問を子どもたちに与えてあげれば、子どもたちも気づく。例えば、ゴミ拾いさせる。ゴミ拾いが終わったらお疲れさま、ではなくて、どうやったらゴミ拾いが無くなるのだろうか、ということの方が大事だ。ボランティアというのは無償の時間の使い方であるので、この時間をどうやって有効に使うかということの方が大事で、運動することよりも、考えさせなきゃいけない。そういう機会だと僕は思う。

(3) パネリスト 岐阜県立可児高等学校教諭 浦崎 太郎 氏

- 高校生が地域の課題を理解して取り組むためには、地域に慣れ親しむという土台が必要であり、中学生のうちから身近な大人との関わり合いを覚え、大人に対する親近感・信頼感と地域に対する一体感を培っていく必要がある。
- 多様なステークホルダーが集まる集団に入っていくと、自分の役割が見えてくる。そうすると相互に役割を認識し合えるということが分かり、そこに自分の相対価値というのが見えてきて、「そうか、自分は、このためにいるんだ。」みたいなことで、意欲が湧いてくる。だから、高校は高校、大学は大学、役所は役所とか、バラバラで動くのではなく、多様なステークホルダーが一緒になってやっていくことで、みんなが意欲的になれるし、さらに、今、色々な課題解決というのは、細分化された専門家でもできない。お互いが多様な集団がつながり合うことで初めて、突破口が見えてくるということだ。
- 多様性に慣れ親しんで参加していくようにするには、幼少期からの丁寧なステップアップ、これが必要だということで、高校でいきなりスタートではなく、中学校で。中学校ですぐ大人と関わるためには、小学校で異年齢交流とか、丁寧に積み重ねていくことが必要である。そうすると、より多くの生徒が、多様で異質の交流に参加でき、社会全体としての創造性・生産性も上がっていく。だから、幼少期から戦略的にやっていくことが大事だと思う。
- 教員が生徒にグループワークさせる以前に、教員も地域の一員として、地域の課題解決に加わっていく、異質な世界に飛び込んでいくということが、今、一番大事だと思う。しかし、その前提は教員だけの話ではない。社会全体の話だ。今、企業も役所も、どこでも細分化になっている。学校だけではない。だから、まちの色々な方々が、まちの未来のために、まちに住んでいる色々な市民の方々と手を携え

て、何を生み出していけるのか。そういうことが大人自身に、今、求められているとも言える。大人が立場を超えて、そのような課題解決活動をしていく、その結果として、子どもが育っていく、これがこれから必要な「人づくり」のあり方だと思う。

- つまり、「まちづくり」と「人づくり」は完全に一体的なものであるということだ。そのような形で、まず、教育は教員の問題ではない。子どもに何かする問題ではない。大人がいかに関係性を再編成していくのか、それが課題であり、肝だということを共有できるといい。

(4) パネリスト 函館市立桔梗中学校教頭 對馬 寿恵 氏

- 小学校や中学校は地域にとっての拠り所となっており、地域の方と話をすると、感受性豊かな中学生時代に経験した体験が生き方に繋がっていると感じる。地域のボランティアにはいくつか参加させていただいているが、中学校でできることを地域と一緒に模索していく時期に来ている。
- まずは地域を知ること。そのことを小学生なり、中学生なりが機会を持って、そして、地域の方から学ぶような機会、これを設定していくことが1つ、私たちのできることだと思う。それから、その学びの流れ、子どもたちが小学校の段階でこういうことをする、その校区内で情報共有して、中学校では次こういうことをする。そういうことをまず一つしていかなければならないと思っている。
- 総合的な学習であるとか、特別活動の部分でも、地域について考える機会であるとか、アクティブ・ラーニングの視点を持った教育活動を小学生の時から積み重ねていくことによって、まず地域のことを知る、それから考えるということをつくさんしていくことによって、次につながっていく。そして社会に出て困らないような発信していけるような子どもたちを育てられればいいと思っている。

(5) パネリスト アカデミックポータル函館 副編集長・学生記者 土門 寛治 氏

- キャンパスコンソーシアム函館の下部組織であるアカデミックポータル函館というサイトで、8高等教育機関から各3名の学生記者の記事を編集している。
- 函館市の中で生活していて気づくことは、地域の課題を実際に行動している大人の方が多いなという印象だが、行動してくれる大人、支えてくれる大人もいて、動きたい学生もいるものの、どうしても、その2つがうまくマッチングできていないという印象もある。色々やりたいと思っている学生が周りには多いが、挑戦することがリスクになっている。挑戦することがリスクにならないような支えを大人の方をお願いしたい。
- 今後、子どもたちが函館を好きになるかとか、どういう子どもたちを育てるかという話の中で、1つ大事だと思うのは、函館を道南の中の函館とか、北海道の中の

函館というふうに捉えるだけではなく、世界で見たときの函館の立ち位置がどうなのか、世界で見た函館は一体どういう繋がりを持っているのだろうか、という見方を持つ子どもたちが増えないといけない。

- 自分が高校生の時に地域とどれだけ関わっていたかを振り返ったら、ほとんど無かったりする。大学に来てサークルやアカデミックポータルの活動に関わる中で、地域と関わるのは面白いなと気づいたが、これが高校生の時に、地域の中に飛び込んでいく機会があれば、どれだけ面白かったかと思ったりする。
- 今後、函館は人口が減っていくなどの問題もあるが、今までの教育は、市場・経済とかを支える人材を常に送り出すためにできたと勉強していると思うところで、これからは、そういう市場を支える人を送り出すのではなく、市場を作り出す人が必要ではないかと思うので、新しい挑戦をしていく学生を、是非皆さん支えていただければと思う。